

09年

第 2 1 回

戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集＜16集＞

軍人に賜わりたる

勅諭（）―サービスです

我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所に
こそある昔神武天皇躬（みゝ自分）つから
大伴物部の兵（つわもの）ともを率る中国
（なかつくに）のまつろはむもの（まつら
はぬものゝ従わぬ者）ともを打ち平け給ひ
高御座に即かせられて天下（あめのした）
しろしめし給ひしより二千五百有余年を経
ぬ此間世の様の移り換るに随ひて兵制の沿
革も亦しはしはなりき古（いにしえ）は天
皇躬（み）つから軍隊を率る給ふ御制（お
んおきて）にて時ありては皇后皇太子の代
らせ給ふこともありつれと大凡兵権を臣下
に委ね給ふことなかりき中世（なかつよ）
に至りて文武の制度唐国風に倣はせ給ひ六
衛府を置き左右馬寮を建て防人（さきもり）
なと設けられしかは兵制は整ひなれと打続
ける昇平（平和）になれて朝廷の政務も暫
く文弱に流れれば兵農おのつから二つに分
れ古の徴兵はいつとなく壮兵の姿にvari遂
に武士となり兵馬の権は一向（もっぱら）
にその武士ともの棟梁たる者に歸し世の乱
れと共に政治の大権も亦その手に落ち凡（
おおよそ）七百年の間武家の政治とはなり
ぬ世の様の移り換りて斯くなれるは人力（
ひと）のちから）もて挽回（ひきかえ）すへ
きあらすといひなから且は我国体に戻り且
は我祖宗の御制に背き奉り浅間（あさま）
しき次第なりき降（くだ）りて弘化嘉永の
頃より徳川の幕府その政衰（まつりごとお
とろえ）へ…31頁へつづく完まで掲載

ところ 緑生涯学習センター

月・日 平成21年7月25日

戦争体験を語り継ぐ集い 実行委員会

発刊の言葉

第21回戦争体験を語り継ぐ集い開催にあたり戦時体験記録集第16集を発刊することができました。ご投稿いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

総選挙直前の現下、政権交代がかかる今回の選挙は重要な意味を持ちます。来年には「国民投票法」が施行可能になります。

平和憲法維持のためこの冊子が少しでも役に立てばと念じております。

目次

レジュメ	もっと聞いておけば良かった	語り部	船曳 愛子	一頁
レジュメ	父の戦争体験を	語り部	近藤 弘子	二頁
レジュメ	侵略戦争に反対した僧侶	語り部	小林 靖	三頁
レジュメ	その災難は死後へも続く	語り部	大村 達雄	四頁
レジュメ	記憶にない父はシベリア永久凍土に眠ると言われ	語り部	伊藤 君代	五頁
シベリア捕虜強制労働体験者新聞投稿文		語り部	沢井 富子	六頁
レジュメ	軍国少年であった私	語り部	橋詰 四郎	七頁
旧満州国略図		語り部	岡本 澄子	八頁
戦争になったら今度はあなたかもよ		語り部	多田 幸子	九頁
死の街・チチハル		語り部	足立 加代	一〇頁
満州開拓村・開拓団とは		語り部	橋詰 四郎	一一頁
万宝山開拓団		語り部	多田 幸子	一二頁
痛 哭 の 記		語り部	足立 加代	一三頁
忘れられない手のぬくもり		語り部	橋詰 四郎	一四頁
引揚者の母「田端ハナ」さん		語り部	多田 幸子	一五頁
平(たいら) 棧橋物語		語り部	足立 加代	一六頁
平棧橋復元式進行中	奇跡か執念か偶然か?	語り部	橋詰 四郎	一七頁
軍人に賜りたる勅諭(表紙よりつづく)		語り部	多田 幸子	一八頁
戦陣訓考		語り部	足立 加代	一九頁
		語り部	橋詰 四郎	二〇頁

もっと聞いておけば良かった
父の戦争体験を

語り部 船曳 愛子

父

明治40年(1907) 12月11日生

昭和19年(1944) 1月 召集(赤紙応召) フィリピンへ(37歳)

母 姉 私(2歳6か月)を残して

昭和20年(1945) 8月15日 敗戦

昭和20年(1945) 9月15日 アメリカ軍に投降

昭和21年(1946) 12月28日 生還(39歳)

平成14年(2002) 死亡 享年94歳

①はじめに

②父の応召・戦争

③出征まで父の生い立ち

④生還後父の生活信条

⑤父の遺言と戦争を知らぬ世代へ私のお願い

侵略戦争に反対した僧侶

その災難は死後へもつづく

語り部 真宗大谷派正福寺坊守 近藤 弘子

竹中彰元（1867年 慶応3年～1945年・昭和20年）享年78歳

10月29日 岐阜県垂井町 真宗大谷派明泉寺に生る
9歳で得度（とくど＝仏門に入る）

時代背景

政府は不拡大方針で戦争にさせぬと断言しつつ泥沼へ突入して行った

彰元61歳から69歳の時

1928年6月4日（昭和3年）日本軍列車ごと張作霖元帥爆殺

1931年9月18日（昭和6年）日本軍満州事変勃発さす

1932年1月28日（昭和7年）日本軍上海事変起こす

3月 100%日本 満州国 傀儡さす

1937年7月7日（昭和9年）日中戦争に突入

1937年9月15日出征兵士を送る時「戦争は罪惡発言」

12月 南京占領 南京大虐殺起こす

名誉回復への道程（みちのり）と過去への反省



師 元 彰 中 竹

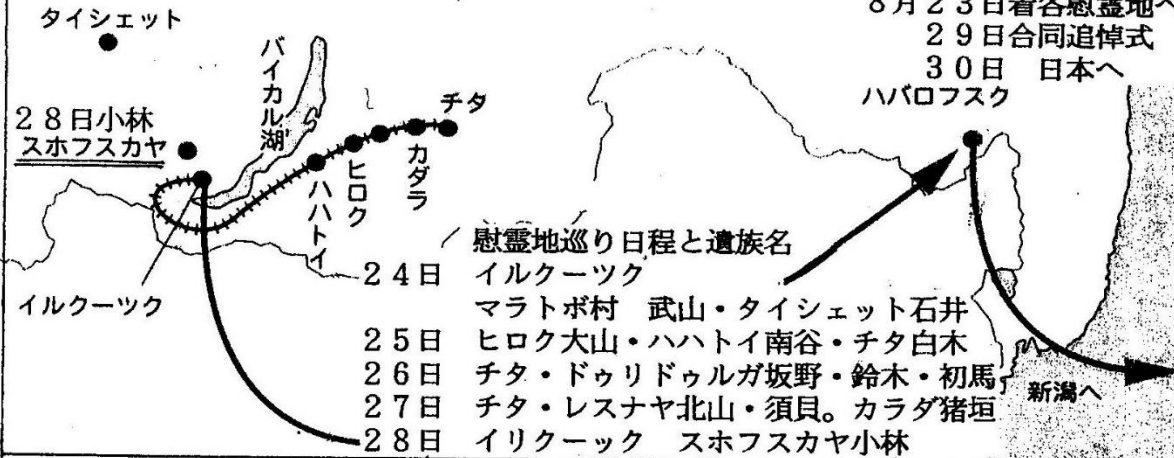
記憶にない父は
極寒の地シベアリ永久凍土に眠ると
言われ父の面影を探し求める墓参

語り部 小林 靖(おさむ)

小林隆昌(大正2年10月22日〜昭和21年1月10日)享年33歳
昭和18年30歳の時 妻 長男(2歳7か月)を残し
満州第689部隊(牡丹江)に応召(赤紙)入隊
昭和20年8月9日 日ソ開戦
8月15日 敗戦
8月20日 武装解除
10月31日 黒河より入ソ

父に助けられたとシベリア生還者の来訪で「死」を伝えられる

行程図〈C班〉 平成14年8月23日〜8月30日



平成3年4月18日、ゴルバチョフ大統領が持参したソ連領内死亡者名簿は38,388人。その内第32地区イルクーツク地区で1,389人死亡。更にイルクーツク地区第8収容所スホフスカヤ村では7人が死亡。その中に「語り部」の父、故小林隆昌氏を抜粋した。

氏名	生年	階級	死亡年月日
アベ・トヨタロ(ロウ)	大06	兵	昭21/11/21
コバヤシ・タケナサ	大02	上等兵	昭21/01/10
ハシダ・ミノル	大14	兵	昭21/02/07
ホリコシ・ケー	大08	兵	昭21/03/10
ヤマグチ・ミツオ	大13	兵	昭21/04/02
ヨシダ・オツセ	大13	兵	昭21/03/14
ワタナベ・タケシ(ゾウ)	大12	兵	昭21/01/16

この欄は<戦争体験語を語り継ぐ集い>編集担当

思うと、生きて帰ってきた日本人の一人として「ソルマ」の言葉の重みを伝えたいと筆を執らせて頂いた。

した数は70万人以上といわれている。

ノルマと闘い 多くが死んだ

無職 橋詰 四郎

(愛知県豊明市、77歳)

ノルマとは決められた目標の達成をさすロシア語である。今は日常の生活用語として定着しているが、地獄のシベリアから私たち抑留者が日本に持ち帰ったロシア語であることは、あまり知られていないようだ。

敗戦と同時に、旧満州(現在の中国東北部)の日本軍人、軍属64万人と満蒙開拓青少年義勇軍を含む日本男子を、旧ソ連は「男狩り」して、ソ連の戦後復興のためシベリアに強制連行

夏服で連行された日本人に、零下30〜50度の冬があったという間に、最初の冬は日本人の誰もが経験したことのない酷寒、飢餓、重労働、疫病でドミノ倒しのように死に、ソ連は死者名簿の作成を厳禁し、帳簿上死亡者ゼロの無謀な扱いを強要した。これに追い打ちをかけたのが「ソルマ」であり、ノルマ未達成者は監倉刑や食糧物を減らされるなどの非人間的な扱いを受けたのである。

飢餓状態の中でノルマに苦められ、望郷の願いもむなしく、ノルマを呪って死んでいった多くの戦友を

豊明市 橋詰 四郎 (無職 68歳) 来日したロシアのエリツイン大統領が抑留問題に就け「非人間的な行為を謝罪する」と断とうされたのをテレビで見た。

私はシベリアからの引き揚げ者でも復讐者でもなく「生還者」だと思っ

抑留謝罪機に ロシア見直す

平成三年、当時のソ連大統領が来日した時、抑留日本

年十二月の興安丸で終とされている。この間六

人以上の日本人が、既口

七人を含め三万九千九百八十五人と発表された。このケ

これを機会に、ロシアと仲良くしたいものだ、心

者数は三万八千三百八十八人。こちも見事に並んだ数字その三八(さんぱち)数字に激怒した。

捕虜の私をロシア人は、敵国としてでなく接してくれた。これも生きながらえた一因だと思っ

軍国少年であつた私

終戦の日

太平洋戦争終結を告げられたのは昭和二十年八月十五日正午昭和天皇の玉音であつた当時私は旧制中学四年生で南区の化学工場に動員されていた当日朝先生が用件は告げなかつたが正午に工場の広場へみんな集まるように言われた職員も一緒にあつた暫くしてラジオから放送されたのが「忍び難きを忍び」の敗戦の知らせでしたしかし私にはその時日本が負けたとは信じられなかつたと言うのも翌十六日には学校から射撃班に所属していた私に学校の機関銃を持って豊橋の連隊へ入隊するよう指令されていた自分分は当時軍国少年として誇らしく思っていたので日本が負けたとは信じられなく入隊が取りやめになったのをむしろ悔しく思った今考えれば遠州灘付近に敵が上陸してくると言われていたのでそれを迎え撃つための要員であつたと思われる戦争が続いていたら沖繩戦と一緒に十六才で私の生涯は終わっていた今年傘寿を迎え五人の孫達も大学を出て社会人になったのもいるが戦争は決して起こしてならないことを家で一杯飲んだ時に話している

語り部 大村 達雄

12人兄弟姉妹の第7子でした

昭和17年 熱田中学(旧制)入学

8月16日、学校の軽機関銃を持って豊橋の連隊へ義勇兵として入隊が決まっていた私入隊前、我家の庭で軽機関銃を左に維持し直立不動の姿勢の私(撮影は親戚の人)

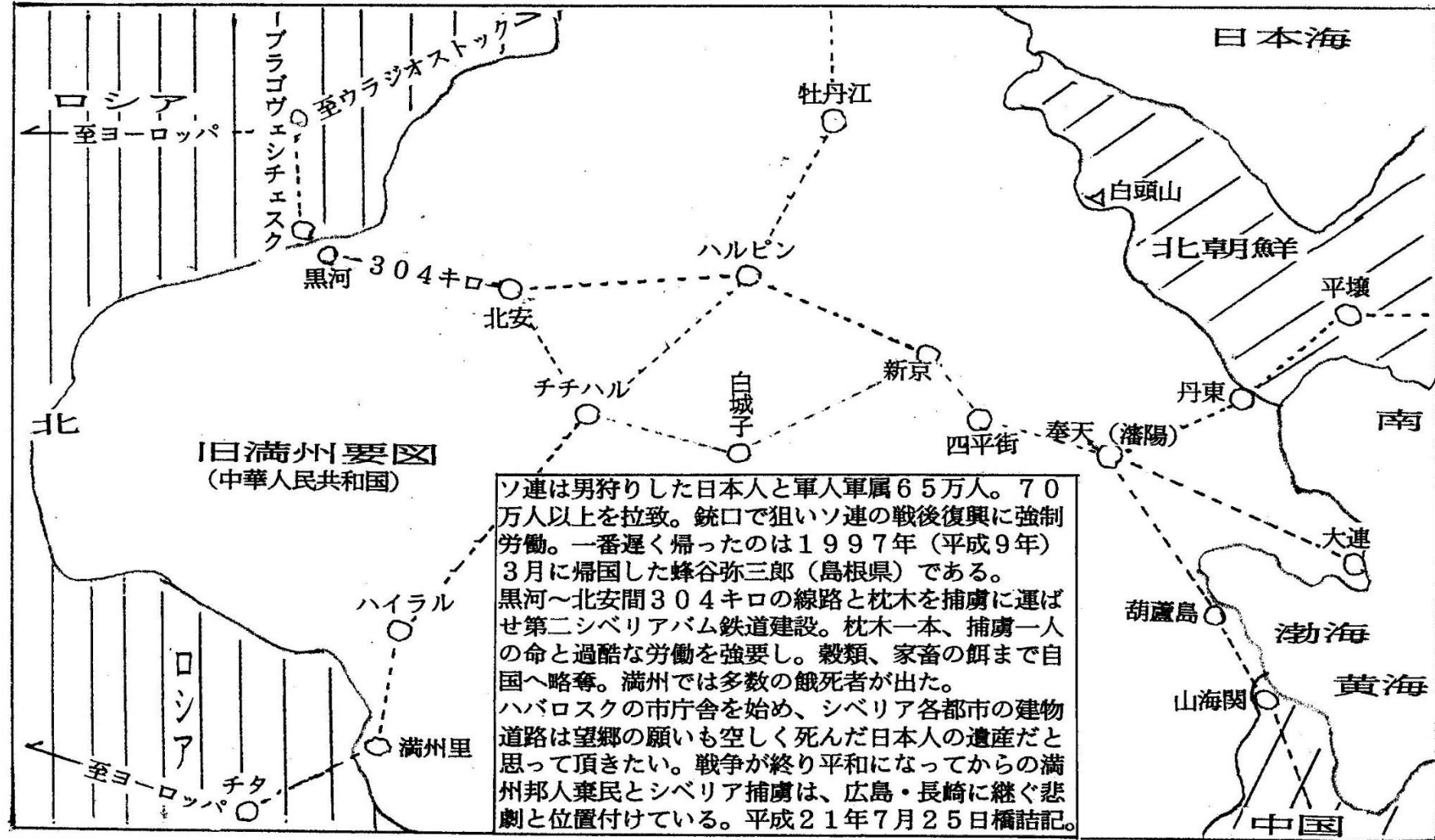


昭和20年8月16日の日記の一部

八月十六日 水曜 晴
今日はよく義勇隊出発の日であ
るしかし敬慕してゐた通り取止め
に止つた直ちに学校へ行つて試験
を解いたそして皆講堂へ集合
してより先生の話があつた其
の後で二階の圖書室の掃除を
やて本を収めた晝食後は吾々
は早く歸して貰つたしかし
他の者は十時迄行つた歸宅
してより豆炭の運搬や煉炭
の運搬をやつた又上端で仕事
をやつた夜は館屋の人達が見え

東

都市・鉄道は大幅に割愛省略してあります



西

戦争になったら

△7度はあなただかもよ

沢井 富子

忘れもしない昭和20年(1945)8月9日。ソ連軍は目の前の黒龍江を渡河。私の住むソ満国境の黒河に侵攻。関東軍(満州にいた日本陸軍の別称)が人間爆弾でソ連軍の市街地侵攻を阻止している最中、隣組からこれが最後の「回覧板」だと『缶詰を取りに来る事。今夜0時迄に黒河駅に集合。それ迄にもしものことがあった時は、先ず子どももの頸動脈を切り、その後自決せよ』ソ連軍の砲弾が唸りながら頭上を飛び、各所に命中爆発している最中の出来事でした。

この年の5月22日、満鉄に奉職していた夫は赤紙応召され。2歳の長男、七か月の長女と私3人で満鉄の社宅に住んでいました。避難するに当り何を持っていくか考え、実印、時計、満鉄家族カード、娘の百日祝いに写した家族4人の写真、入隊前夜主人が私宛てに書いたメモ、乾パン、湯冷まし、娘のオムツ等を大きな布袋に詰め、肩から掛けるようにし、衣服は三人とも着れるだけ着て一枚でも多く身に着け、長男は冬オーバー、私は綿の入ったネンネコを着て家を出ました。真夏に冬物変だと思えますが、黒河の朝は夏でも大変寒いです。毛布もあれもこれもと山ほどあるのに、2歳と0歳と私ではこれが限界でした。持出す荷物をまとめている時、顔見知りの満人が家具を売ってくれと来ましたが断ってしまいました。どんなに負けていても最後には神風が吹いて日本が必ず勝つと教えれ、この家に親子4人で帰って来ると信じていたからです。避難中いつも後悔していました、家具を売ってお金に代えていたらと。

駅に向かう人々の列、それは始めて見る体験でした。それぞれが大きな荷物を持って、体を海老のように曲げ布団を背負っている人、避難する人の渦が右往左往し道路はひどい埃がもうもうと立って、汗の顔に粘り付いてきました。

一般邦人を優先し、満鉄関係者は最後の列車とのことで、駅で随分待たされました。その時、真つ暗な夜空にパッと火の手が上がりました。誰かが叫ぶように言いました「江岸(黒竜江)の方角だ!日本人が火を付けたのだ!」すると今度は駅の近くで炎が夜空を舐め始め、大人の男子が踊っているような姿が黒く浮びあがりました。「あの人は気が狂ったのだね」と、無感動な声が聞こえてきました。夜空に爆音が近づき「敵機だーっ!」誰も命令しないのに全員一斉にホームから線路に飛び下り伏せました。私も2人の幼子を線路に寝かせ、その上に覆い被さり2人に「お父さんと同じだよ、お父さんもこうして戦争しているんだよ」東の空が明るくなり10日の朝が来ましたが、まだソ連兵は攻めて来ません、関東軍が江岸で必死になって守っていてくれるのです。

朝やっと無蓋貨車一両をつけた蒸気機関車が仕立てられ、最後の満鉄関係者

家族が乗り込みました。随分荷物を持った人達がいました。先に荷物を乗せてその上に腰掛けたり、自分の回りを見るとお年寄りもいます。病人も臨月の人も、満人の兵隊が銃を持って乗ってきました。私達の護衛でしょうか？。死がそこまで迫って来ている街から、「生」が約束されている処へ行けたらよいのですが、江岸でソ連軍を食止めているのは私の夫達だと信じて、とても緊張した出発でした。出発して間もなく敵機が飛んできました。屋根のない平たい貨車で空からも何処からも丸見えです。皆無駄だと知っていても伏せて息をひそめていると、背中を敵機の銃に狙われている恐怖になるのです。脅しにきたのでしょうか、銃撃することもなく飛んでいきました。列車は何度か止まり、また動いて、いつの間にか長い長い避難列車になっていました。

そのうち命令がきて子連れのは私は、小窓が二つ付いた屋根付き貨車に乗換えました。人か乗っているのので扉はいつも少し開けたままです。袋に入った穀類が積んであり、入口近くに負傷した満蒙開拓青少年義勇軍の少年が一人、頭に白い包帯をして穀類袋に腰掛けていました。隣は50歳位の男の人、その横には老婆と嫁、そして私達と7人でした。突然敵機が低空で飛んできて、扉の隙間から敵機の操縦士の顔がはつきり見え、私と視線が合い恐ろしくて咄嗟に袋の山によじ登りました。その瞬間、シャーッ！と音が聞こえました。振り向くと今まで包帯して腰掛けていた少年の顔が半分ないのです。シャーッという音は血が体内から飛散した音だったのです。50歳位の男の人は静かに、ゆっくりと胸のポケットから封筒を出して「これを表書きの人に渡して下さい。お願い！」と、言い終わらないうちに音もなく倒れ、死にました。老婆が背中が痛いと言いました。厚い綿入れの背中に千切れ、背骨に傷がつき血が流れていました。お嫁さんが手当てをしました。自己紹介もしないうちに、お互いの名前も判らぬ人達が、アッと言う間の出来事でした。

そうです。忘れられないことがあります。乳飲み子が死んでいるのに、日本の土に埋めるまでは離さないと、真夏ののに、おんぶしているので死臭が凄くなり、周りの人が歩いて一人で日本へ帰れと怒鳴り、停車中原っぱに埋められるのを泣く泣く見ていた姿。私の背中の子はまだ生きている、死なせぬものかと、私も一緒になって泣きました。

今度の停車は少し時間があると教えてくれたので、近くの湿地帯へオムツを洗いに行きました。北満の原野は「野地坊主」の群生した湿地帯が多く、一株巨大クラゲほどの野地が沼地に密生していて、戦闘中隠れるのに絶好の場所になるほどです。洗いやすい糞を探していると、糞の中を這い這いしながら、眼をパッチリ開けて私を見上げている老人がいます。遠くから歩いて逃げて力尽きたのでしょうか、死神のような目で見えるのです。私は怖ろしさが先に立ち、助けてあげることも出来ず、両手を合わせ合掌しながら後退りして逃げしまいました。私の心は鬼だったのでしょか。

列車は動きだしました。敵機は何度も攻撃してきました。日本の飛行機はど
うなったのか、黒河から304軒南にある「北安パイアン」に着くまで一機
もみませんでした。北安はまだ北満です、これから南満を通過して、朝鮮半島
を縦断して釜山迄と思うと不安ばかりでした。私は耳を疑いました。聞こえて
きたのは「全員降りなさい」日本の女と子どもは北満の北安で放り出されてし
まったのです。

そしてあの8月15日。この日から日本人は「東洋の鬼リベンクイズ」
と呼ばれ、世の中がひっくり返ってしまいました。日本人ということだけで、
何もしないのに子どもからも石を投げられたり、苛められるので外へ出られな
くなりました。8月20日頃から毎日毎日、大勢の日本兵が長い長い列車でソ
連兵に監視され、私達が出発した黒河へ向け北上していくのです。それを毎日
眺めて、機関車も列車も私達から取り上げた理由が判りました。それと同時に
北安は恐怖の百鬼夜行の街になりました。監獄の囚人ばかりで一番危険な歩兵
にされたソ連兵集団は、昼も夜も理不尽な襲撃をしてきました。眉を剃り落し、
丸坊主で頭や顔に煤を塗り男に変装した私は逃れましたが、娘を連れてくる親
は大変なもので、母親が娘の身代わりと泣き縋っても駄目なのです。発狂寸前
です。

両方の腕にいくつもの腕時計を巻き付けているソ連兵も大勢いました。略奪
したのでしょう。ソ連の女兵隊が若い日本男子を「ダワイダワイ」と連れ去り、
帰ってきませんでした。何と言っても婦女子と老人ばかり、襲撃されても通報
も逃げることも出来ないのです。小さな日本の子が木に縛られ耳を削がれて泣
いているのを助けました。もう地獄です。

私と同じような子どもを連れだした女性が転がり込んできました。侵入してきた
ソ連兵に次々と輪姦され、半死半生で辿り着いたと言いました。彼女は隠すこ
となく語りました。「拒み抵抗すれば私は殺され子ども達は餓死するので、こ
のような目に遭いましたが、子ども達は真正正銘の日本人です。この子ども達
の命を私は「性」を犠牲にして救ったのです。私は生きます。生きて子ども達
を日本の夫の家族へ渡すまで死ねないのです」と、私は壮絶とも言える婦人の
言葉に感動しました。私も母親として子どもの命が守れるなら犠牲にすると。
日本の家庭では家族が、私達のために「陰膳」を供えて無事を祈っていると思
いますが、祈りも届かぬ地獄にいたのでした。

酷寒の冬を北満「北安」で過ごす自信がないので、再び少ない荷物を纏め、
南下する避難列車に乗り込みました。今度は客車です。いくつかの駅に止まり、
「緩後」という駅に止まりました。夫は黒河駅に転勤するまでこの駅で、日本
人も満人も差別せず働いていました。ぼんやり思いを巡らせていると「沢井さ
ん、沢井さん」と大声が聞こえました。窓から手を振ると満人の方が、「義

重大人は？」と「応召で兵隊」と言う。「アイヤー・不好いプハオ、奥さん欲しい物言いなさい」欲しい物ばかりですが生野菜に飢えていたのでキャベツを沢山頂き皆で分け合いました。彼は今もこの駅で働き、南下する避難列車の度に捜したと言いました。北安で酷い仕打ちをした満人と比べ地獄で仏様と思いました。そして占領地の現地人に好かれていた主人に感謝しました。

ハルビン駅に赤いマークの付いたソ連の蒸気機関車と、ソ連の運転手がいました。線路が続いているので当然ですが、占領地の物資を略奪して運ぶのも大変だと思いました。いろんなことがあってとうとう南満「奉天」現藩陽」まできました。また降ろされ次の南下列車を待つことになりました。衣食住がゼロなので同じ境遇にあって罵り合う人もいます。特に前職は立派な肩書きの人が、食べ物になると一番汚い人になるのです。力になって励ましてくれる人は、前職が立派な肩書きの人から軽蔑されている人達です。私はここで本当の人間を見ることができ、改めて夫を誇りに思い、この子ども達を守り抜く決心をしました。

宿舎まで歩きます。歩いてても歩いてても着かないのです。もう何キロも歩いているのに「止れ」の合図はありません。2歳6か月になっていた長男が「お母さん、ボク大きくなったら、お母さんをオンプしてあげるから、今ボクを抱っこして」と言うのです。「お母さんは赤ちゃんをおんぶして、両手にお荷物をこんなに持っているから抱っこする手がないのよ。ボクはお兄ちゃんでしょう、強い子は偉いとお父さんが褒めてくれるよ。我慢して頑張って歩こうね」ここで止って座り込んだらもう立てない、歩けない。行路死になる。そのような人達を何人も見ているのです。子どもを連れ日本に辿り着くまでは死ねないのです。

日本が進出した大企業の社宅が宿舎でした。三階建の大きな建物がずらりと並んでいましたが、住人は一人も居ず、敗戦と同時に現地人の襲撃、略奪されているので、窓ガラス一枚も無く割られ、部屋は荒らされ畳も窓カーテンもないのです。各部屋の水道も破壊され、外部に一か所水の出る所があり、毎日行列しての水汲みは大変な労働でした。ここでもいろんな事がありました。生きていくために働いてお金を稼ぐのです。私は満人が作った「竹輪もどき」類を仕入れ露店商でした。ある時、見知らぬ満人が馴々しく流暢な日本語で「奥さん、可哀想で見えてもらえないよ。こんな利の薄い商売よりソ連兵向きの品物をお世話してあげるから」と、私は背中の中をゆさぶりながら断りました。

口車に乗らなくて本当に良かったです。誘いに乗って墮落するところまで墮ちて、日本に帰れなくなり、泣き暮している日本女性がいるのです。また裸で踊るととてもお金になる話もありました。五歳までの男の子の脳ミソは貴重な薬になるから、人買いが男の子をさらって行くと、耳を塞ぎたくなるような話が次々

聞かされるのです。私の仕事露天商は辛い毎日でしたが、一日二十銭の儲けで母子3人なんとか露命をつないでいました。そして私のような境遇の者から早く帰れるようになったのです。

昭和21年(1946)7月、アメリカ軍の戦車輸送船の船底に乗り、葫蘆島から母子3人ボロボロの服を着て、心は立派に着飾って胸を張って、二人の子を連れ引揚げてきました。満人からも好かれていた主人は、昭和23年、戦死したと厚生省から通知がありました。

また戦争をしたら、あなたは、私は戦争とは関係なく生きられると断言できますか。体を張ってでも戦争を阻止してください。平和のために。

死の街・チチハル

伊藤 君代

昭和21年(1946)10月6日私は、空襲で焼け野が原にされた祖国の街・町・村を車中から眺め、「坊や、もう直ぐお母さんの生まれた家に着くよ。」と膝の遺骨に話しかけ桃谷駅で下車しました。生まれ故郷は想像以上の戦災の傷跡に足のすくむ思いでした。実家は焼けずに残っているだろうか？満州を出た時からの不安が大きく胸の内にふくらんできました。とにかく家を確かめなくてはと、重い足取で実家への坂道を上りはじめ曲り角まで来たとき、前方の薄暮の中に弟らしい人影が浮かんできました。「善治、善治ではありませんか？」と、大声で呼掛けました。ギクリとしたように止った影が、足を宙に飛ばして駆け寄りました。「お姉ちゃん……お帰り……」弟との出会いは神の使いに迎えられた感激でした。

二年半振りに跨いだ実家の敷居でしたが、迎えて欲しかった母は、異国での私の出産を案じながら不帰の人となっていました。仏壇に坊やの、母には孫の遺骨を安置し、「お母さん、孫を連れて帰って参りました。」と、報告し、チチハルで生まれ、チチハルで短い一生を終えた生涯が走馬灯のように脳裏を駆け巡りました。

私が軍人の妻として、チチハルの軍人官舎に居住していた時、敗戦。臨月の身重の体で官舎にいては危険なので、邦人家族と一緒に小学校に避難しました。異国満州では日本人がご主人様で、満人は日本人に仕える地位でしたが。この日を境に主客転倒してしまったので、日本人は自分を見失うほどの衝撃を受けました。そのような中で私は自分を叱りつけました。お前の体は、お前一人のものではない。と、胎内の子も察知するのか怯えもがくように動くのです。

ソ連軍が進駐してきたら小学校では危いと私は軍人会館へ戻されました。街は国境の北満から避難してきた開拓団の家族で溢れていました。みな一家の働き手、大黒柱を兵隊にとられ婦女子と老人の大集団が、行く当てもなく生死を賭してさまよう人達に、救いの手はあるのかと胸を痛めました。それは私自身に問い掛けている言葉でもありました。

軍人会館も安全ではありませんでした。朝鮮人通訳を先頭にソ連兵が略奪にやってくるのです。僅かな身の回りの物しか持たない私にも、拳銃を胸に突き付けて有り金残らず奪っていくのでした。街は、チチハルは各所で日本人の商店、日本人住居が略奪・暴行・殺戮と暴徒に襲撃され死の街と化していました。

そのような中、出産予定日9月19日が近づき、病院に入ることが出来ました。逆子と診断され苦しいお産でしたが男の子が誕生し、無事？お役目を果たした思いでした。ところが敗戦の悲しさ、病院はソ連軍の命令で閉鎖され、出産三日目で病院を放り出されました。まだ動けない体を友人の助けで荷車（タアチョ）に揺られて軍人会館へ戻りました。療養食は主食が高梁（コウリヤン）ですから産後の栄養は十分に採れませんが、坊やと二人で生き抜いて日本へ帰りたいと耐えつづけたものです。

11月初め、クループ肺炎に罹り高熱に襲われ母乳も出なくなり、高熱により意識も失っていたのですが、夢うつつの中で死を覚悟していたことを覚えていました。死線をさまよっていた母子は手厚い看護を頂いて蘇生することが出来ました。よくお世話して下さいました和歌山県の方と伺っています。看護して下さいった早田勘一さんと、伊東婦長さんの消息を探しだして、お礼を申し上げます。ばなりません。

床上げは12月に入ってからでした。母乳が出ないので、毎日ビール瓶一本の牛乳を入手しなければなりません。同室の方にお願ひし、衣類などを売りお金にしてつないでいました。戦争に負けたので暖房手配も出来ず、室内温度も外気と同じマイナス20度。このような劣悪な環境の中でも坊やは日に日に大きくなっていました。

日本人はみな息を潜めて、いつ訪れるかと春を待ちつづけているのです。その頃いよいよソ連兵の鬼畜の暴挙に曝されていきました。憲兵の家族は揃って前途を悲観し。青酸カリで集団自殺をとげられました。私はもう売るものが無くなりました。満人の主人であった日本人が、帝国陸軍の妻がプライドを捨て、満人の家の女中になる道を選びました。坊やの牛乳代を得るために。

マイナス20度、30度の厳寒の中で掃除、洗濯も坊やを背負って、自分ながらよく耐えたと思います。私が母だからこそ耐える力が湧いてきたと思います。あなたの孫、私の子をまだ見ていない日本のお母さん、私は頑張っ恐怖の冬を乗り越え三月も過ぎました。もう直ぐ春爛漫の4月が来るのです。

お母さん！

私のお母さん、私はもう耐えられませんか。寒さが去り暖かい陽射しが日ごとに長くなり、日本へ帰れる力を蓄えようと、劣悪な環境の中で計画している最中、坊やが笑顔を失ってしまったのです。医者も探しました、薬もさがしました。私の命と引き換えにと神様をお願いしました。七か月の短い命でした。

坊やの死は私の生きる力も希望もなくしてしまいました。神を恨み仏を罵りました。力も抜けふぬけになった自分を、何故か外側から冷静に見ている自分に気付いていました。冷たくなった坊やの骨を私と同じ体温にしようと、胸に強く抱いていると、思わぬ景色が見えてきました。見回せば私の周囲にはいたる処で幼子が、寒さと飢えと病で、次々と命を奪われているのです。また、混乱や逃亡の途中で満人に襲われたり、子どもを奪われたりもしているのです。迷い込んだ山中や、草原で子どもを亡くした親、前途を見極め悲観し我子の命を断ってしまった人。不幸な子ども達ばかりが見えてきました。私は最後の最後まで坊やを看取り、私の手で葬って上げる事が出来たことを。私は再び生きる力が湧いてきました。

思わぬ人が訪ねてきました。私を女中として雇ってくれた人が、喪が明けて働くなら、良い雇主を紹介してあげると言うのです。私の陰日向ない働きを見ていて中華飯店に推薦して下さったのです。私は一生懸命体を動かして、辛さ悲しさを忘れようとしただけなのに。店内は暖かく食べ物も栄養満点で腹一杯体力の回復が自分でも判るほどで賃金も頂き、服装も髪形も満人風になりました。

現地女に化けたので遠出の外出もひとまず安全な行動が可能になり、住んでいた官舎の様子を見に行きました。無残の一言と言う外はありません、窓ガラスは全部割られ、部屋という部屋はこじ開けられ荒し放題で、畳まで略奪されていました。壊された元住まいの扉の隙間に紙切れが挟んであり、風になぶられていました。手にとって驚きました。なんと名古屋の姉からの手紙でした。どなたが運んで下さったのでしょうか。あの、そして今も混乱の中で。

市内探索中とんでもない行列に遭遇しました。その人達は裸馬に乘せられ、両腕は荒縄で無残にも後ろ手で縛られ、手拭いで目隠しされていました。その人達は日本が負けるまで日本に協力した満人ばかりでした。町内会役員や軍に協力した人達で、人民裁判で死刑を宣告され、市中引き回しに晒されているのです。嫩江（ノンジャン）河原で情け無用と、一言の反論さえ許されず銃殺された犠牲者は数十名を超えているそうです。そして更に驚く話を聞いてしまいました。この死刑の方法は、日本の言う事を聞かないとこうなると、満人に対して見せしめ刑にしたのを、そっくり真似ていると言うのです。日本の敗戦で押えていた自尊心や不満が爆発して暴徒となった満人の気持ちの理解できる出来事でした。戦争の犠牲者は勝敗に、敵味方に関係なく、婦女子が最大の被

害者でした。それは今もこれから先も同じです。平和憲法を守って下さい。

満蒙開拓移民団（開拓村）

満蒙開拓青少年義勇軍とは

中華人民共和国の旧満州・内蒙古・華北に入植した日本人移民の総称である

橋詰 四郎

昭和6年（1931）9月、満州に派兵されていた日本軍は緻密な計画を立て、南満州鉄道線路を爆破し、爆発を合図に中国軍の仕業だと難癖を付け、満州全土を武力制圧。半年後の昭和7年（1932）3月、100%ニッポンの傀儡国家満州国を建国したが、満州国は国際法では存在していなかった。

4年後の昭和11年（1936）5月「満州農業移民百万戸移住計画」をたて、戸数百万、移住農民五百万人の農業移民入植計画を発表した。時代は、昭和恐慌のどん底で、特に農村小作農の疲弊と困窮は極限に達し、娘を売春業者に売るなど、人身売買が法律で認められていた人間の尊厳など皆無の時代で、南北アメリカ・南洋日本委任統治諸島と日本領土の台湾・朝鮮半島・樺太への移住を推挙していたが、満州を強行独立させ農民移住に特に力を注ぎ始めた。

移民募集は「王道楽土」「五族協和」のスローガンで宣伝し、このスローガンは新生国家満州国が対外向けに発表したものでなく、日本政府が日本国民に樂園満州国が誕生したと、国民を誘い出すために作成し、一戸当り10町歩の農地を約束。入植地確保の方法は満人農民が祖先から営々と開墾、耕作面積を広げた農村集落一帯を治安悪化地と指定し「無人化」にする政策を強制し、集落全員を更なる未開地へ追いやり「無人地帯」にした後、武装訓練した日本人農民移住者に満人農地を与え「治安安定地」と宣言。敗戦までにこのように奪った農地は2000万ヘクタールに及ぶと言われている。当然元農民の抵抗反撃行動を予測し、入所者に小銃を与え軍事教練を施し「兵士予備軍」の役目を背負わずなど、全く狡猾な手段で、場所（地形）によっては、満人集落を中心に外輪に円形になるよう、武装した開拓村を配置し満人集落監視などの任務も負わせた。

入植各地では土地を奪われ反撃襲撃も頻繁に発生し、奪い返しにくる満人集団を「匪賊」「馬賊」と悪の権化集団と報道し、日本国民は少しの疑いも抱かず政府報道を信じた。また、日本の侵略に抵抗する人々達と、朝鮮独立を果たそうと満州へ逃れ独立運動を行う韓国人と連携し、日本の進出を排斥妨害するパルチザンの地下運動も頻繁に発生していた。これらを封じ込めるため訓練し現地人になりました「特務機関」を各所に放ち、憲兵に摘発させ731部隊へ送り「生体実験教材」に用いた。橋詰と同年兵熊谷も中国語が堪能なので任

に就き見破られ殺害された。日本人は「東洋の鬼」リーベンクイズ」と怖れられ、逆らうと殺されるので従順を装い、日本の負けで今迄の恨みを一気に爆発させた。

昭和13年(1938)1月、尋常高等小学校高等科2年(現Ⅱ中学2年)の義務教育を卒業した男子を対象に「銃と鋤を持って目指せ我等の新天地満州へ!」と『滿蒙開拓青少年義勇軍』を公募し、農地のない小作農子弟から多くの少年が満州で経営農業主になるのを夢見て応募し、8万6千530人の少年が茨城県内原訓練所で3か月の軍事訓練を受け満州へ送り出された。特に義勇軍はソ満国境に沿い開拓地を当てられ、人間皆で国境を守る役目を課せられていた。食べ盛りの少年達はいつも空腹で、満州人の家へ押込み食料を強奪し住民は恨みをつのらせていた。日ソ戦で朝水開拓団の少年達を陣地に保護したとき、少年達は空腹が我慢出来ず、牛を殺し狼に襲われたと言って食べ。養鶏場の温度を加熱鶏舎を焼き、数十羽の鶏を食べた事などを聞かせてくれた。

青少年義勇軍も含め、満州開拓移民の総数は32万人とされている。ソ連軍攻撃から敗戦による戦争終結期間は僅か一週間なのに、日本政府になにがあったのか説明はされていないが、満州の在留法人は見捨てられ棄民扱いにされ、帰国できたのは11万人であった。この夥しい犠牲者数は日本の満州進出政策が、相手の心情を無視した独りよがりで、日本人の数だけ日本を恨んでいた証拠にほかならない。気付かなかったのは裸の王様の日本だけだった。

万宝山開拓団

岡本 澄子

昭和20年(1945)8月9日、ソ連軍が満州国に攻め込んだできた情報が流れ、午後7時頃には早くも近くの満人集落の者達が騒ぎ出したと知らせを受けた。開拓団では組長宅に集まり、一夜を明かすことになり、手に風呂敷包み2コと、リュックには背負えるだけの荷物を詰め、子どもを連れて各自の家を出た。

折角、昭和15年(1940)に入植し、収穫の秋も目前のになって開拓地を捨てるのは断腸の思いで、血の出るような努力も、今は一切が無に帰してしまふのは余りにも残念と、皆は後髪を引かれる思いで家を捨てた。殆どの男子は根こそぎ動員で兵隊にされ、残されたのは50歳以上の男子5人と、婦女子30人ばかりで途方に暮れ、これからどうすれば良いかと暗い話ばかりで、組長宅の空気も湿りがちであったが、結局「無抵抗」を決議し、一刻も早く駅まで行こう。そうすればまたなんとか逃げられ、生き延びることが出来るだろうと言う有様。

僅か3時間後の午後10時頃には、空家になった開拓団家屋に満人達が押入り、手当たり次第に略奪を始めたらしい物音が聞こえて来る。幸い日本人が集まっている所へは襲撃してこない。寝もやらず夜の明けを待つ、明るくなると田畑は荒らされ、各家は全部満人が入り込み、道具類、衣類、什器に至まで外へ放り出さしている。そして私達の方をジッと見つめているのだ。

私達の男子は腰に日本刀を手に歩兵銃を持ち、威嚇するするために一斉に実弾十二・三発を空に向け発砲すると満人は驚いて家の中へ逃げ込む。この隙に夜中に準備しておいた大車(ターチョ)三台に急いで乗り込み、馬に鞭を当て駅への道を全速力で駆け出す。これを見た満人はワッとばかり棍棒や鍬などを振り上げて追ってくる。五・六発射つと追うのを止め、何事か相談を始めた様子なので、この機を逃したら命が危ないと大車を更に走らす。濛々と立つ土煙に全員顔も手も真っ黒になるが、構ってはおられない命懸けの逃避行なのだ。

開拓団は匪賊、馬賊に襲撃される危険に晒されているので、いつも鍬と歩兵銃を持ち、襲われたら歩兵銃で応戦し、馬を走らせ軍隊へ救援を通報する訓練を受けているので、その仕組みで落ち延びることが出来た。馬を走らせ一日半で一番近い駅に着いた。この間食事なしの強行軍だった。徒歩なら全員襲撃され殺されていたと思う。到着した頃は誰彼の区別は付かず、目は凹み疲労は激しく、放心状態の有様であった。少し休み駅に近付くと、駅周辺には200人以上の満人が群がり、大声で叫びながら棍棒や鍬を振りかざして、駅員に詰め寄っているのだ。これを見た男子はまた空に向け発砲しながら、私達を乗せたまま大車を駅の入口めがけて突き進むと、駅員もこれに力を得たのか、満人を追い散らし一時正常に戻った。

問題はこれからどうするであった。汽車がいつ来るかも全然判らないのだ。13日の朝まで男子と駅員は歩兵銃を武器に徹夜交替で駅の警備に当る。14日10時頃、白城子より新京へ向かう最後の軍用列車がきた。私達は躍り上がって喜び、余りの嬉しさに抱き合って大声で泣いた。満人は駅の周り100メートル近くまで来て、襲撃略奪の準備を固めワイワイ奇声を上げ、嚇してくる。列車に乗っていた兵隊が群衆の頭上を飛ぶように狙って軽機関銃をバリバリ射ってくれたので、群衆は怪我人も出ず蜘蛛の子を散らすように四散したが、一時的な現象に過ぎない。

軍用列車に乗っていた将校が、私達は新京警備に行く途中です。全員乗って下さい。持ち物も忘れるな。駅員も駅を放棄して避難乗車して下さい。と言ってくれたのです。地獄で仏とはこのことだと、みんな最後の力を振り絞り、荷物と駅の重要機器を外し、急いで列車に積み飛び乗りました。

再び来ることはないだろうと、血と汗で開拓した第二の故郷、ここで生まれ

た子ども達には故郷、万宝山が次第に遠のいて行くのを見てみると、無人と化した駅に満人達が集団で雪崩込んで行くのでした。

動員された父と夫は、とうとう帰ってきてくれませんでした。

痛 哭 の 記

多田 幸子

汰江開拓団で敗戦を知ったのが8月17日。直ちに着た切り雀で、慌ただしく脱出して既に三日目になる。開拓団農場、家屋が満人に襲撃略奪され、老人と婦女子だけの脱出だから足取りも重い。疲れた一行が原野の中にある木立ちの陰に入り込み休むことになった。みんなヘタヘタと大地に寝転び倒れてしまふ。三歳になった長男に子守歌を低く歌って寝かし付けようとしたとき。不意に飛行機の爆音が聞こえたと思ったら、バリバリと低空よりの機銃掃射をうけた。幸い負傷者もなく一安心と、飛び去る飛行機の後を眺めていると、それに入れ代わったように暴徒と化した満人が、五・六十人ワッと手に手に棒や旧式の鉄砲をかざして押し寄せてきた。

「ここに居るのは女と子どもだ！。武器もなんにも持っていない。頼む！撃たないでくれ！」と、団長の老人が大声で嘆願するが、日本語なので満人暴徒には通じない。驚いている暇はない、一同恐ろしさと命を守るために、大人達は素早く子ども達を真ん中に集め、二十名位の大人が円陣を作り子どもを守る姿勢をとった。日本人が暴徒に殴打され続けている中、団長はその前に仁王立ちになり懸命に叫び嘆願している。私はここで殺されると覚悟を決め地に座していた。

暴徒の先頭にいた四十歳くらいの大男が、老人と婦女子ばかりと知ったのか、殴る蹴るなどしている仲間を制止し、私達の持っていた僅かな衣料、食べ物全部取り上げてしまった。満州の夏の夜は日本の冬の寒さだ、夏衣で野宿の一塊りの老人と婦女子の道中は、悲惨などでは表現出来ない有様です。痩せ、弱り、汗と泥で真っ黒な幽鬼の姿で、体温を奪う雨の中も、雨宿りする場所もない草原をひたすら歩くのです。子どもも。

どこをどう歩いたのか、何を食べて生き延びたのか判らぬまま、疲れ倒れる人が次々と出ましたが、励ます言葉などもなく黙々と歩きつづけました。チチハルに着いた時はたった八名でした。団長は責任を感じ自決しました。汰江開拓団は「全滅」でなく、見捨てられた餓死行路死集団だったのです。

亡れない手のぬくもり

足立 加代

黒河をあとに

シベリアの死者については証言はあるが、遺品というものが一切ありません。不幸は予告なしに飛び込んで来ました。主人が31歳、私が28歳の暑い夏のあの日のことは決して忘れることはできません。

私と主人は手をしっかりと握り合ってお互いにじっと眼と眼を見合うばかりで無言でした。あの時の主人の手の温もりが今でも忘れられません。「あとはいっさり頼むよ」と囁いているようです。

8月9日の朝、北満、黒河の街は騒然と混乱の極みとなり、鉄道勤めの主人は9時半頃我が家に飛んで帰りまして、「子どもを連れてすぐ汽車に乗り。これが最後の引揚車だぞ。早く早く」と貯金通帳、印鑑など一纏めにした風呂敷包みを手渡してくれましたが、私はただ呆然と立ちすくんでいるばかりでした。すると主人は更に語気鋭く、「早くせよ！ソ連兵が来るぞ。達者で暮らせヨ。二人の子どもを頼む」と目に涙をためて家を飛び出したものです。私は大変なことが起こったのだとしか判らず、私はどうしたらよいか迷うばかりでした。

すると隣の社宅の奥さんがやっぱり風呂敷包み一つ抱いて、私に「奥さん早く駅まで走らなければ列車が出る」と叫んで、私の手を引いて走りました。放念したような私は五里霧中で言われるままに駅まで走るのだが、二人の子どもが早く走れず、三分前に発車したアト。

幸いに居留民団が遅れる人を見込んでいて、大車(ターチヨ)数十台を準備してあったのでヤットの思いで乗り、孫呉まで100キロの土道を馬車で後退することになった。一歳半の男子を背中に、4歳の娘を左手に、右手にはタッタ一つの全財産と、僅かな食料を包んだ風呂敷を抱きしめ、隣の奥さんから早朝からの出来事をヤット聞くことが出来た。

対岸ソ連領ブラゴエより、ソ連軍のアムール艦隊の艇隊が海兵隊員を乗せて来襲と共に、ソ連領より砲兵が黒河をめがけて砲撃開始しようとしているので、黒河の街はスッカリ混乱しているし、虎林、虎頭へは既にソ連軍が近接し、東満一帯の日本軍は大混乱となり続々と後方へ撤退中とのことだと言うのだ。そして何故奥さんだけが知っているのも不思議だった。

何一つ財産らしいものも待たず、丸裸の民間人一同は土煙の中を呆然と大車で逃走とは……。疲労と汚れで見る影もない格好で孫呉まで辿り着く

と、大車の馭者の満人は一人残らず逃げてしまい、他に何等方法もないので、北安（ペーアン）までの200キロを歩くというのだ。そして僅かな食料を支給されて、婦女子がただ南へ、北安を目指してトボトボと苦しい脱出行、それは惨めなものでした。

今まで戦争といえば、日本軍の発表は勝った勝ったばかりで、それを信じていたのが今度は反対に、徒歩で、護衛もなく、婦女子が逃げ惑うとは思ってもみなかったが、今更他に方法もないので歩くだけ。2歳ぐらいの子を背負っている奥さんは、炎天と空腹、奥さんの肩からダラリと下がっている子の腕は、既に紫色に変色し死んでいるのに、奥さんはまるで背の子が生きているように汗ビッショリで話し、疲れているのにあやしている。

他の人々から、もう臭いから捨てよと言われても、放棄できないのだ、この子と一緒にしないと日本へ、実家には帰れないと、鬼の形相で一番後ろからついてくるのだ。皆、もう自分だけが一番大切なのだ。他人なんか構うこともできないし、そんな余裕なんか少しもないのだ。私は、自分の子どもだけは死なすまいと一人は背負い、一人は手と手を紐で縛り握り、無理に歩かせながら、胸の奥から涙が込み上げてきました。汗と土埃と涙の脱出歩行、四歳の娘も野宿しながら200キロトボトボと。

主人はシベリアの何処かへ連れて行かれたのか消息が一切ありません。ただ黒河で戦死したとの公報がとどきましたが、いろいろのツテで聞いて回ると、鉄道関係の者は一団となり、ブラゴエを経由ハバロフスクに送られたとか、外蒙ウランバートル方面に送られたとか聞いています。それが本当と信じ何処かでまだ生きておるものと信じ、今でも私の心の底に生きています。31歳の若い顔をして。

私は、あの時の手のぬくもりを思い、この手に残る感触が私の歴史であると、信じてきたものですから、これからもある限りは主人の手の温もりを心の宝として、生きる力として暮らしていこうと考えています。

引揚揚老若の母

田端 八ナさんのこと

シベリア生還者 橋詰 四郎

私の部屋の正面に昭和20年5月、19歳の時写した14名の軍隊の集合写真がある、時々写真と話し入院にも持って行く。捕虜になると親兄弟が差別されると、私は降伏を拒否し部隊から離脱し、軍人と判る物品を焼却した。戦後40年経った昭和61年、戦友が私を探し当て写真を頂戴した、生きて帰れたのは4人と書いてあった。結婚した私には11人の孫がいる。死んだ10人は人を恋うることも、失恋のほろにがさも、青春もなく死んでいった。すまないすまないと思っている。

平成6年5月27日「舞鶴平（たいら）引揚棧橋復元記念祭」で「田端ハナ」さん等と一緒に頂戴した湯呑を私は愛用している。「湯呑」には引揚港舞鶴と引揚船33隻の船名と延船426隻、引揚者数664、531名の他、引揚開始、昭和20年10月7日。引揚終了、昭和33年9月7日の文字が記入されている「写真」も「湯呑」も私には鎮魂の品なのだ。

日ソ戦では殺しに來た敵と呼ぶ市民を、私が先に殺し生き抜き、シベリアは若さで乗り切った。栄養失調にされ昭和22年ダモイ（帰国）で舞鶴に上陸した。捕虜であった私は「卑怯者」「非国民」「恥知らず」と罵りを受ける覚悟をしていた。狭い平棧橋の両側にお母さんを思わせる年齢の婦人達が、お母さんのシンボルである純白の割烹着姿で、「よくぞ生きて：」「寒かったでしょう」「苦しかったでしょう」と、手を差し延べて迎えて下り、私は名古屋駅で夜を待ち、夜中に「こっそりと人目を避けて」帰る計画をしていたが、昼間明るい太陽の光りを受け堂々と帰れると、安心させて下さったのが、舞鶴のお母さん達だった。ありがとう。

戦友会は大正14年生れが仕切った。この年代が天皇の命令で兵隊にされた最後の皇軍なのだ。二年毎の戦友会も舞鶴をコースに組込み、「引揚げの母」に私達は、私達自身の元氣な姿を披露して喜んで戴いていた。敗戦の混乱、舞鶴港が引揚げ港と決まった時、ハナさんは「お上」より、引揚げ者を迎える組織づくりを頼まれたと、銃後を守る女性達は子を夫を徴兵され「お上」を信じ、ひどい仕打ちをされてきた。今更「お上」の言うことなど聞けないと、裏話も聞かして戴いた。664、531人から「引揚げの母」と呼ばれていた人の平成元年9月の執筆をお届け致します。

平（たいら）の引揚棧橋は語る

田端 ハナ

引揚しとは

昨春 はるかなる母なる人に桃一つ

一粒のブドウ長寿をいのりつつ

の俳句を添え、倉敷の引揚者のK氏が自作の桃や、ブドウを送って下さったり、何度も読み返しました。嬉しいでした。その方の手紙にはこんな言葉が書かれていました。「私は昭和二十三年舞鶴で第二の人生を踏みしめて倉敷に帰り、今も尚元気に暮らしています。朔風吹きすさび零下三十度四十度の酷寒の地で命を失った亡き戦友の事を思い出し、今もすすり泣く夜が度々あります。自分は有難いと、あの平の引揚棧橋を踏みしめた日の事を思い泣けてくるのです。先生本当に有難うございました。舞鶴市民の方、婦人会の方々、白衣の天使看護婦さんの尊い姿が忘れられません。」

四十四年たった今でも、全国の名も知らぬ多くの方々から、生きていて良かった、という喜びの便りをいただきます。然しその方々の数も年々少なくなってきました。お便りをいただくと私は必ず御返事をさし上げます。今の舞鶴の様子を詳しく書いて、そして舞鶴の海の蒼さは今も同じと。

人生の道は未知です。然しこの道は素晴らしく遠い険しい道です。生きている。という事は全宇宙の中で最も不思議な奇跡であります。生と死は紙一重と申しますが、無限の可能性のある、深い思考力をもった人間の命が今生きているのです。この瞬間生きているという事は、誰にも説明の出来ぬ奇跡であると思います。そういう人命を私は八十年以上も、瞬間の移り替わりに堪えて丈夫で生きてきました。感謝で一杯です。私の生活の中にはどんな時も「損得勘定」は全くありませんでした。

冬の海鳴り、白銀の嶺、舞う風花、私も母として、母なればこそ舞鶴港が敗戦の悲しみの中から。おこなってきた外地からの集団引揚業務の援助奉仕に、身をすてて、家庭をすてて、婦人会員の方々の並々な献身的な御協力を得て、共に尊い勤めを果たす事が出来ました。

日本民族が初めて受けた敗戦の試練を、最終的に処理した所、舞鶴港こそ引揚の原点とも言える母なる港であります。私には引揚の十三年間、毎日毎日が、くる日くる日が、明暗と哀愁のドラマであり、感動と興奮、無念と号泣の人の世の有為転変の姿でありました。終着駅と同時に再出発への踏切台になった舞鶴港は、六六四、五三一人の引揚者を迎えました。内訳を申しますと

ソ連	四五五、九五二人
北鮮	二、三七五人
中国	一九一、七〇四人
南鮮	一四、二二五人
その他	二七五人
計	六六四、五三一人 でありました。

尚 一六、二六九柱の御遺骨をお迎え申し、白布に包まれた木箱を大浦中学校の生徒がしっかりと抱いてくれました。就航引揚船は延四二六隻であり、更に中国へ三、九三六八人、朝鮮へ二九、〇六一一人の帰国者を送り出しています。

舞鶴港への引揚第一船は雲仙丸でした。引揚者自身は勿論のこと、その何倍何十倍の家族にとっては、生ある限り忘れる事の出来ぬ港、思い出の港として胸の内に残るであろうし、反面帰れなかった肉親を持った人達にとっては、希望の灯の消えた痛恨の舞鶴港であった事でしよう。

「端野いせ」さんの話は余りにも有名であります、船のつく度毎に「新次はいませんか、新次新次……新次はいませんか」と叫び続けられた母のはらわたをえぐるようなあの叫び声が、私には今も蘇ってきます。又何年もの長い間、大浦中学校の用務員として船の着く度、いえ船のこない日も遠くの海を眺め、ひたすら夫の帰りを待ちわびた舞鶴市京口の水島房子さん、いつとはなしに「岸壁の母、岸壁の妻」という言葉で呼ばれるようになり、こんな方々は沢山おられました。その方々をしっかりと抱きしめつつ私も泣きました。

これまでの世界戦史の中でも今次のような「海外引揚」という、民族の大移動はありませんでした。明治以来半世紀の間、海外雄飛を志した日本人が第二次世界大戦で、徹底的敗者の立場に追われた悲惨な姿は、言語に絶するものがありました。今更ながら平和がどんなに大切であり、この有難さを永久に残さなければなりません。忘れてはなりません。「国破れて山河あり」と申しますが、二十世紀は世界各国各地におきましても、闘争の時代であり、戦いの続いた世紀です。今も尚戦火の消えない国もあります。

発展途上国といわれる国が世界五十億の人口の五分の四を占めています。且つての日本民族も、小国なるが故に闘争を以て、過去の大英帝国のように、国を大きくする事を考え弱者への痛め付けを始めました。日清、日露、日独戦争等、偶然か必然か勝利を収め、闘えば必ず勝つという奢りが裏腹となり、この度は徹底的に世界の敗者という座についたのです。天皇が悪い、軍部のせいだ、ではなく国民総懺悔の時だと思います。あと二十世紀も十年余りでやってきます。二十一世紀こそは、地球は一つ、地球市民として世界の隅々まで平和の光が輝き、差別のない平和な社会であればと願わずにはいられません。現在日本は世界の経済大国と言われていますが、国民の勤勉と努力もさる事ながら、軍備を持たずに暮らせるおかげだと思っています。

戦地におきましても、いまわのきわに兵士は「天皇陛下万歳」ではなく、たった一言「お母さん……」と呼んで亡くなられたと聞いています。自分を産み育ててくれた母を忘れられませんでした。母なる国日本、母なる港舞鶴、多くの海外引揚者を迎えた母なる平（たいら）桟橋であります。

私と引揚田心い山山あれこれ

昭和二十年十月七日舞鶴港へ雲仙丸入港、引揚船第一船です。舞鶴市の助役さんから私にグループを連れて直ぐ出迎えてほしいと要請がありました。戦争に勝つための婦人会は戦争に負け解散し、まだ二か月も経っていないのに婦人会など結成出来る社会情勢ではなかったのです。そこで私は東奔西走して「さつき会」という三十名余りの有志会を組織していたのです。入港の日は薄ら寒い午後でした。ご近所の皆様の応援も得て五十名くらいで待構えて、海の彼方を見守っていました。空は曇り小雨が降り出し、海より冷たい風が吹きつけます。じっと見守る五十人の眼、湾外遙か彼方の水平線上に黒い点が浮かび上がりました。寒くて震えて皆寡黙になって、船の姿になりました。誰かが「あれよ」と叫びました。ぐんぐん力強く迫ってきます。三十分近くもかかったでしょうか、私達の前に船が着きました。

「お帰りなさい……お帰りなさい。」口々に出迎えの婦人達は話しかけるように声をかけます。然し引揚者はただ無言、何度話しかけても無言。皆黙って上陸、静かに整列、私が「皆様よくお帰りになりました。お疲れのことと思います。舞鶴の港です。日本です。安心してお帰り下さい。」と、ご挨拶しても、一言の返事も返礼の言葉もありません。私達は不思議に思って顔を見合いました。小雨が大粒の雨になりました。急いで西舞鶴駅へ向け出発です。無言ままの行進です。私達は汽車の出発も見送るので一緒に歩くのです。私は目敏くこれだと思う婦人を選び、彼女の隣に並び一緒に歩きました。「私達は今日、皆さんが日本に無事にお帰りになったのを大変嬉しく喜んでいます。然し皆様からは一言の言葉もなく、私達は混乱しております。何かあったのでしょうか。」と、おそろおそろ尋ねました。

婦人は涙を一杯ためて信じられない事を言い出したのです。「船が朝鮮の港を日本に向け出港しました。敗戦からたった五十日で日本に帰れるのです、こんな嬉しいことはありません。一緒に引揚る兵隊達は船員に間違はなく舞鶴港へ向かうと聞くや暴徒と化し、次々に未婚の女性を犯したのです。占領地の婦女子を暴力で犯したと同じ事を始めたのです。そして犯された娘達は次々と玄海灘へ身を投げたのです。私達は悲しみに包まれて昨夜は一睡もしていません。」と。私は絶句しお返しする言葉もありませんでした。乗船した人数は知らないが、下船で迎えた帰国者は二、一〇〇

人でした。記念すべき引揚第一船はこのような汚名を残していたのです。

中心人物 マハム物語語り

舞鶴湾頭水平線の彼方から引揚船が直進してきます。興安丸とうっすら文字が見えてきました。感激で胸が一杯です。つくど直ぐ、お迎えのご挨拶に伺います。ある時は玉有船長さんから日本では入手困難な特別コーヒのサービスを受け「いつもご苦勞様」と、労いのお言葉も頂戴しました。水雨降る朝にも、もやけぶる夕にも、炎熱の日も、こうして四二六隻の引揚船が入港してきたのです。物語りにもなった勇敢な「忠犬クマ公」。クマ公はシベリアで日本人捕虜と偶然巡り逢い仲良しになり、捕虜の移動にも離れずついて行き、ダモイの日本人捕虜と一緒にシベリアの奥地からナホトカへ来たというのです。

興安丸が錨を巻上げ舞鶴へ向け動き出しました。船と共に遠のいて行く日本人に向いクマ公が一声高く鳴くと同時に、氷の海に飛込み船を目掛け懸命に泳ぎ出したのです。陸も船上も大騒ぎになり、船長は停船を命じクマ公を確保したのです。陸からも船上からも大歓声があがりました。港内での日ソ間協定で、錨を揚げ目的地向け動き出した船は領域内は止まることを禁止なのです。協定破りをしたのです。国対国だから国際紛争の火種？は大袈裟？。玉有船長の一身を捨てた英断でした。

引揚船の入港 ドラマの粉々

船が入港すると大丹生沖に錨を下ろし検疫が始まります。報道陣は競って縄梯子などで登り取材。私は出迎船に乗りメガホンで「船上の皆様、御帰国おめでとうございます。ここは祖国舞鶴の港です。本当に長い長い間ご苦勞様でした。この喜びこの感激、私達も国を挙げて一日千秋の思いでお待ちしておりました。遠い異郷の地で故郷の山を思い、川を夢見てご自分を励ましてこられたと思います。御覧下さいこれが祖国日本の山々です。海です。後僅かで平（たいら）な陸です。皆様には皆様の肉親の方々が胸をふるわせ、固唾を飲んで皆様の上陸を待っております。私は平々橋の人達に皆様がお元気だと伝えに戻ります。そして援護局でお目にかかります。」

引き返した私は集まっている援護局へ慰問に行き、入院した人がおれば国立病院へお見舞いに走り、三日目には西舞鶴駅へお見送り、これが日課でした。ある日の事です。平々橋でお迎えしている時、突然「田端先生、森松です。森松です」と言って、私に飛び付いてきた痩せ衰えた青年があらりました。彼は私の宮津校時代の教え子でした。お母さんも、奥様もいらっしやる前で、私に抱かれて泣きました。そして極度の栄養失調が回復せず、ご自分の家で、ご家族に見守られ帰らぬ人となりました。

国始まって以来、敗戦による海外同胞の引揚という仕事は、思えば大事業でした。

今日も暮れゆく 異国の丘で 友よつらから 切なかる
我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりゃ 帰る日も来る ときも来る

この哀愁切々たる歌を涙と共に、また一人で口づさんだ頃を振り返って、たまらなくなる時があります。舞鶴市の婦人会活動の殆どは。この引揚援護奉仕への全面協力でした。全国の母の代表、妻の一人として自信と誇りを持ち、六十六万有余人の帰国者と、十万に近い出迎え家族の織りなす哀歓の渦。その歴史が即私達舞鶴市、京都府連合婦人会の尊い歴史でもあったのです。私達は情熱の全てを燃やし、全国からお越しになる留守家族の方々の接待にも当り、ご無事のご帰還を共に願ひ祈りました。

旅館が満員の時は婦人会会員の家にもお泊まり頂きました。舞鶴市連合婦人会だけでは十分な奉仕はできないので、物心両面の援助を京都府連合婦人会や、近畿の婦人団体にもご依頼し、頼まれて東京で開催された全国婦人代表会議で、つぶさに引揚とは、かくも切なるもの、そして悲しくて厳粛極まりないものと、涙と共にお伝えさせて頂き、認識して頂き活動資金のカンパにも預かりました。私は一生懸命で命懸けでした。

その頃の世相は、日本中が焼け野が原にされてから惨めな敗戦。自暴自棄で人の心も荒み「特攻隊崩れ」と言う表現もされた時代で。配給制度は崩壊し、お金よりも焼け残った着物にお金以上の価値が付き、食料と交換でき国民は自分が食べるだけに必死でした。着ている衣類を脱いで食べ物と交換するので「竹の子生活」と新語も生まれました。このような世相の中で引揚奉仕に理解を示す人達も現れ助けて下さいました。地元だけに舞鶴婦人会も物資も少しずつ豊かになり、昭和二十五年頃から引揚の方々一人一人に十円程度(今の三百円位)の御土産を出せるように致しました。

思えばはるかなる至難の数々の日々でした。引揚は戦争が原因で起こした世紀の悲劇であり、決して再び繰り返してはならぬ事です。お米も十分でないあの頃、雑炊をすすり、副食もままならず、乏しい食事を感謝と笑顔で囲んだ我が家でした、引揚の始まった頃はお菓子や果物は全く店頭に出ないのです。そのような中で農村婦人会へ私達の気持ちを話し、サツマ芋の提供をお願いし、舞鶴市のトラックで載きに回り、東舞鶴駅と西舞鶴駅の駅頭で大釜でサツマ芋を蒸し、乗り込む引揚者一人に二個お渡しできました。「八年ぶりです」と言う人も泣きながら食べてくださいました。大豆のいり豆。手巻き煙草など、いろいろ考えて湯茶と共に接待させて頂きました。中には、接待を一切無視し、沈黙で押し通し、お渡ししてもわざと落としたり、こぼしたりするグループも現れ始めました。

昭和二十六年頃より、果物やお菓子らしい包み物が出回り始め、少しづつ戦争の痛手から立ち上がる景色が見え始めてきました。そして大量の蜜柑を引揚船の中へ届けてくださる農村もありました。引揚者自身は勿論、私達も感謝し奉仕の励みになりました。昭和二十八年頃には、援護局内で引揚者に出す祖国での最初の食卓は、赤飯に鯛のお頭付きになり、敗戦の地獄から急速に立ち直って行く姿を引揚を通して見ることができました。東北地方の婦人会からは郷土玩具の小さな「男女一对こけし」を沢山戴きました。今でも日本のどこかの家に引揚記念として、飾ってあると思っています。季節季節には「蛍籠」「野草の花束」「小中学生の慰問」等々。

海外引揚者と一口に申ししましても、抑留中に洗脳されたのか、グループ以外者とは口を利かない。だんまりに徹し引揚業務に支障（生存確認など）や出迎えのお母さんが「息子ー」と、奥さんが「あなた！」と呼んでも知らん顔で返事もしない組や、日の丸組、天皇島へ敵前上陸と大騒ぎ組、帰郷拒否し全員一丸となり代々木へ組、これ等に紛れ密出国者集団帰国等様々でした。

戦争は赤紙一枚で遠い異国の戦地へ、殺しあいの場所へ派遣されるのです。赤紙が来ると家族も見送る者も「おめでとうございます。バンザイ！バンザイ！」と言いました。「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たから……」こんな歌が今も耳に残っています。略奪・暴行・原爆とまかり通る戦争のおそろしさ、空しさ、悲しさ、私達は嫌と言うほど体験、経験、そして今は歴史で想像できます。この敗戦の悲惨な深いきずあとは、日本の歴史に色濃く汚点を残し、今後永久に消えることはありません。平和こそ最上の宝であり子孫への遺産であります。

こゝにまする引揚船の海をうに
天地もさへう今君帰る
花雪

平成元年九月

田端ハナ



当時を再現し引揚者を待つくたいら栈橋>撮影 橋詰



京都府知事・舞鶴市長を両側にテープカットのハナさん



平(たいら) 棧橋復元式中奇跡が

見知らぬ父はシベリアで死んだと言われ

美智子の父探しの執念が報われる

この文章は、平成7年 第7回戦争体験を語り継ぐ集い 発行
戦時体験記録集 第二集 に掲載されたのを再録

橋詰 四郎

歓呼の声や旗の波

後は頼むとあの声よ

これが最後の戦地の便り

今日も遠くで喇叭の音

思えばあの日は雨だった
坊やは背なですやすやと
旗を枕に眠っていたが
頬に涙が光ってた

ご無事のお帰り待ちますと

言えば貴方は雄々しくも

今度会うのは来年四月

靖国神社の花の下

東洋平和のためならば
なんで泣きましよう国のため
死んだ貴方の形見の坊や
きつと立派に育てます

昭和19年、一歳の山本美智子は、23歳の母親の背中におんぶされ、28歳の父、山本治を天皇の命令で戦地へ送ったが、父の記憶など美智子には一切なかった。

夫の帰りを待つ母に、厚生省から山本治は、シベリア生還者の証言として、昭和21年1月15日、別の証言者は2月12日、更にもう一人の証言者は2月14日、シベリアで死亡していると知らされ、遺族が死亡日を決めるよう言われ、真ん中の2月12日を死亡日に決めた。

美智子の母は、昭和57年、61歳で、23歳で別れた夫の元へ旅立った。母の骨を墓に納めた美智子は、この墓には父の骨が入っていない。死んでも一緒になれない戦争を憎むと共に、戦争を呪い、戦争に巻き込まれた母があまりにも哀れ不憫と、見知らぬ父を恋う情念が一気に噴き出て、記憶にない、見知らぬ父を探す決心をする。

手掛かりは「シベリアで死亡」だけである。美智子の父探しは、全国の有名な温泉地の旅館組合へ、シベリア生還者集りの情報提供を頼み、「集り」があると出向き、「私のお父さんをしりませんか?。」と、聞いて回った。私達は美智子に父の顔の拡大写真を持つよう助言した。

このことは、私達シベリア生還者の耳にも入るようになった。「シベリ

アで死んだ、見知らぬ父を探している娘がいる」と。この美智子の思いはマスコミも無視し取り上げず、地獄のシベリア生還者だけにしか理解されないほど、日本は平和な国になっていた。

シベリア生還者は2千600万円集め、舞鶴市にこのお金で、日本でただ一つ抑留の史実を記憶する、引揚桟橋が朽ち果て消滅したので、復元して下さいと頼み、桧の三倍耐久力のあるアフリカ産コンボシ材で、平成6年5月27日、舞鶴市主催で桟橋復元式が行われ、私は記録係りとして、ビデオ撮影「舞鶴平桟橋復元式典：45分」を制作した。

引揚は当時を再現した。即ち、私達はシベリアで憤死した戦友の名を書いた幟旗を持ち、戦友の無念さを祈願し、美智子にも父の名を書いた幟旗を持つように伝え、美智子はこれに従った。乗船希望者が多いので抽選で決め、選ばれた60人がハシケに見立てた観光船に乗り、船からの上陸で復元式は始まった。

この中に静岡県松崎町の須田がいた。須田は上陸するなり幟旗を持つ美智子に、「俺はシベリア・アラチカ炭坑で山本を埋めてきた。」と伝え、美智子が父の確認用に伸ばした写真を見せると「間違いない」と断言した。その時の須田の年齢は僅か17歳。軍人でなく開拓団の少年であった。ソ連は軍人だけでなく60万から70万人の日本男子を、男狩りしてシベリアへ拉致、戦後復興の強制労働をさせたのである。

私達は、2か月後の7月、永久凍土に眠るシベリア鎮魂墓参を計画し、墓参団員も決まっているので、須田に埋葬場所と山本が身に付けていたものを書かせ、墓参団員の中にアラチカ炭坑で6年間強制労働させられ、昭和25年生還してきた望月に骨を持ち帰るよう頼んだ。望月は私と同じ第六国境守備隊の猛者であった。

7月29日望月は、須田の書いた地図で埋葬場所を見つけ、掘ると、須田の証言通り「祈る武運長久・山本治君」の千人針と遺体が現れ、一目で山本だと確信し、須田の記憶力の凄さに驚くも、望月自身ここでの強制労働を思い出し、17歳の少年には余りにも残酷で、生涯忘れぬことの出来ぬ生き地獄の体験だったのだと思い直す。そして永久凍土が遺体を保護していたのだった。

八月、お盆前、美智子は父の骨を納骨することにした。骨壺を抱き「お母さん、お父さんをやっと探して連れてきたよ。」と、墓石にしがみつき泣き崩れた。私達は骨を渡した喜びよりも、悲しみが先立ち。慟哭する美智子一人を残し、互いに目配せして静かに墓前から引き下がった。

舞鶴港で戦後、同市連合婦人会長として多くの引き揚げ船を出迎えたことから、「引き揚げの母」と呼ばれた。

舞鶴港で戦後、同市連合婦人会長として多くの引き揚げ船を出迎えたことから、「引き揚げの母」と呼ばれた。



舞鶴「引き揚げの母」田端 ハナさん(たばた・はな)

平和祈願万国戦没者慰霊の会元会長、引揚げを記念する舞鶴・全国友の会顧問(7日、考案で死去、99歳。葬儀は9日午後1時から京都府舞鶴市倉谷1720の4の西舞鶴シテイホールで。喪主は長女の泉朝子さん。自宅は同市南田辺71の3。)



「岸壁の母」橋も涙も再現

舞鶴港

戦後、大陸などからの帰国者約六十六万人が第一歩を記し、歌謡曲「岸壁の母」の舞台にもなった「引き揚げ橋」が、京都府・舞鶴港に復元され、二十七日、完成式があった。「橋は歴史の語り部。世界平和の懸け橋として未来永劫(こう)に史実を継承する」とのアピールを採択し、引き揚げ風景を再現した。

復元橋は木製で長さ十五、幅四、かつての橋跡にできた。「引揚げを記念する舞鶴全国友の会」(事務局・舞鶴市)が、引き揚げ体験者らから寄付金二千五百万円を集め実現させた。

式の後、体験者九十人を乗せた汽船が橋に接岸した。エプロン姿の女性や名前入りののぼりを持った人たちが出迎える中、当時の軍服や軍帽姿の人たちが橋に降りた。最後の引き揚げから三十六年ぶりのシーンの再現に、目頭を押さえる人もあった。

復元された橋をわたる引き揚げ体験者ら(27日午後、京都府・舞鶴港で)

平成六年五月二十七日

引揚げを記念する舞鶴・全国友の会



表紙 軍人勅諭より続く

徳川の幕府その政衰（まつりごとおとろえ）へ剩（あまつさえ）外国の事とも起りてその侮（あなどり）をも受けぬへき勢いに迫りければ朕か皇祖仁孝天皇孝明天皇いたく宸襟（しんきん）胸と心）を悩（なや）し給ひしこそ忝（かたじけ）なくも又惶（おそれかしこむ）然るに朕幼（いとけなく）して天津日嗣（あまつひつぎ）を受けし初（はじめ）征夷大將軍その政權を返上し大名小名その版籍を奉還し年を経そして海内一統の世となり古（いにしえ）の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼（りょうひつ）助けてくれる立派な人）ありて朕を輔翼せる功績（いさお）なり歴世祖宗の専蒼生（専もっぱら蒼生）そうせい、人民の事を憐（あは）れ給ひし御遺澤（ごいたく）恵みを残す）なりといへとも併我臣民のその心に順逆の理（ことわり）辨（わきま）へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此時に於て兵制を更め我国の光りを耀（かがや）かさんと思ひ此十五年の程は陸海軍の制をは今の様に建定めぬ夫（それ）兵馬の大權は朕か統ふる所なればその司々をこそ臣下そは任すなれその大綱は朕親之（ちんみずからこれ）を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす子子孫孫に至るまで篤く斯旨伝へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再び中世以降の如き失體なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等股肱（ここう）一番頼とする部下）と頼み汝等は朕を頭首と仰きてその親（したしみ）は特に深かるへき朕か国家を保護して上天の恵みに応じ祖宗の恩に報いまいられる事を得るも得るさるも汝等軍人かその職を尽くささるとに由るそかし我国の稜威（みいつ）天皇の威光）振えさることあらむ汝等能く朕とその憂を共にせよ我武維揚りてその榮を耀さす朕汝等とその譽れを偕にすへし汝等皆その職を守り朕と一心（ひとつ）になり力を国家の保護に尽さは我国の蒼生（人民）は永く太平の福（さいわい）を受け我国の威烈は大（おお）い）に世界の光華（こうか）光り輝く）ともなりぬへし朕かくも深く汝等軍人に望むなれば猶訓諭（なおおしえ）とす）へき事こそありいてやこれを左に述へむ

一(ひとつ)

軍人は忠節を尽くすを本分とすへし凡(およそ) 生を我国に稟(う) くるもの誰かそ国に報ゆるの心なかるへき況(まゝいわんや) して軍人たらん者は此心の固(うた) からてる物の用に立ち得へしとも思はれず軍人にして報国の心堅固ならされは如何程技芸に熟し學術に長するも猶偶人にひとしかるへしその隊伍も整ひ節制も正しくとも忠節を存せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑(そもそも) 国家を保護し国権を維持する兵力に在れば兵力の消長は是国運の盛衰なることを辨(わきま) へ世論に惑れて政治に拘(かかわら) す只々一途に己の本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛(こうもう) 鳥の羽) よりも軽しと覚悟せよその操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

一(ひとつ)

軍人は礼儀を正しくすへし凡(およそ) 軍人たるは上元帥より下一卒に至るまでその間に官職の階級ありて統属するのみならず同列同級とても停年新旧あれは新任の者は旧任の者に服従すへきものそ下級の者は上官の命を承(うけたまわ) ること実は直に朕か命を承(うけたまわ) る義なりと心得よ己か隸属する所にあらねとも上級の者は勿論停年の己より旧(ふる) き者に対しては総へて敬礼を尽くすへし又上級の者は下級の者に向ひ聊(いささか) も輕侮驕傲の振舞ひあるへからず公務の為に威嚴を主とする時は格別なりともその外は務めて懇に取扱ひ慈愛を専一と心掛け上下一致して王事(帝王の事業) に勤勞せよ若軍人たる者にして礼儀を素(みだ) し上を敬(うやま) はす下を恵ますして一致の和諧(わかい) なごむやわらぐ) を失ひたらんには啻(ただ) に軍隊の蠱毒(とどく) 害毒) たるのみかは国家の為にもゆるし難き罪人なるへし

一(ひとつ)

軍人は武勇を尚(とうとう) ふへし夫武勇は我国のさそ古(いにしえ) よりいとも貴へる所なれば我国の臣民たらんもの武勇なくしては叶ふまし況(まゝいわんや) して軍人は戦に臨み敵に当るの職なれば片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同しからず血氣にはやり粗暴の振舞

なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらむ者は常に能(よ)義理を辨(まきま)
へ能く膽力(たんりよく)を練り思慮を殫(つく)して事を謀るへし小敵たり
とも侮らす大敵たりとも懼(おそ)れす己の武職を尽さむこそ誠の大勇なりさ
れは武勇を尚(とうと)ふ者は常々人と接(まじわ)るには温和を第一とし諸
人の敬愛を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌
ひて豺狼(さいろう)猛惡(もうあく)などの如く思ひなむ心すへきことにこそ

一(ひとつ)

軍人は信義を重んずへし凡(およそ)信義を守ること常の道にはあれとわきて
軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難(あた)かるへし信
とは己か言(こと)を踐行(ふみおこない)実行することひ義とは己の分を
尽すをいふなりされは信義を尽さむと思はは始よりその事の成し得へきか得へ
からざるかを審(つまびらか)に思考すへし臆氣なる事を假初(かりそめ)に
諾(うべな)ハイ分かりましたひてよしなに関係を結び後に至りて信義を立
てんとすれば進退谷(しんたいきわま)りて身の措き所に苦むことあり悔ゆと
もその詮なし始に能々(よくよく)事の順逆を辨(わきま)へ理非を考へその
言は所詮踐(ふ)むへからすと知りその義はとも守るへからすと悟りなは速
(すみやか)に止るこそよけり古(いにしえ)より或は小節の信義を立てんと
て大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたは英雄豪
傑とをか禍に遭ひ身を滅し屍(しかばね)の上の汚名を後世(のちのよ)まで
遺せることその例抄(さだめすくな)からぬものを深く警(いまし)めてやは
あるへき

一(ひとつ)

軍人は質素を旨とすへし凡(およそ)質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄な趣
(そし)り驕奢華麗の風を好み遂には貧汚に陥りて志も無下に賤(いやし)く
なり節操も武勇もその甲斐なく世人(よのひと)に爪はしきせらるる迄に至り
ぬへしその身生涯の不幸なりしいふも中々愚なり此風一たび(ひとたび)軍人
の間に起りては彼の伝染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへしこと明な

り朕深く之を懼（おそ）れて曩（さき）に免黜条例（めんちゅうじょうれい）に背いた者は地位を下けたり追放するの意（い）を施行し略（ぼく）此事を誠め置きつれと猶（なお）もその惡習の出（いで）んことを憂（うれ）むて心安からぬは故（こ）とさら）に又之を訓（おし）ふるそかし汝等軍人ゆえ此訓誡（このおしえ）を等間（なおざり）なる思ひを

右の五ヶ条は軍人たらん者の暫（しばし）を忽（ゆるがせ）にすへからずさて之を行はんかは一つの誠心（まごころ）こそ大切なれは抑（そもそも）此五ヶ条は我軍人の精神にして一つの誠心は又五ヶ条の精神なり心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾（かざり）にて何の用にかは立つへき心誠あれは何事も成るものそかし況（ま）してや此五ヶ条は天地の公道人倫の常經なり行い易く守り易し汝等軍人能（よく）朕が訓（おしえ）に遵（したが）ひて此道を守り行ひ国に報ゆるの務を尽くさそ日本国の蒼生（そうせい）人民（じん）挙りて之を悦（よろこ）ひなん朕一人（ちんいちにん）の憚（よろこび）のみならんや

明治十五年一月四日

御 々々

.....

*戦争を語る時、必ずと言ってよいほど『軍人勅諭』『戦陣訓』が語られますが、その中味は？。双方全文を掲げました。日本軍死者の多くは戦陣訓で降伏を禁じた犠牲説が定着化しています。現場の軍隊内、特に初年兵教育を担当する青年将校は、上御一人（天皇陛下）の直属に誉れと確信を持ち、初年兵入隊に際し持込む「戦陣訓・冊子」に目を光らせ、提出させ・没収し・初年兵自身に焼却させ『軍人の命令系統は直属一本』を徹底教育した。軍人勅諭は「変体仮名」「句読点」なしの判読困難文にも拘らず、今より教育レベルの低かった兵が上官に対し一字一句間違わず暗唱させた軍隊の厳しさ、怖しさを察してほしい。戦争に負けてから戦陣訓による犠牲説がなぜ台頭したかも知るべきだ。

戦陣訓 考

日ソ戦生存者 橋詰 四郎

昭和の戦争で日本はアジア・太平洋の国々から、リーベンクイズⅡ東洋の鬼と恐れられ2316万人の犠牲者を出し、昭和20年(1945)日本の負けで長かった戦争がやっと終り、尊い平和が続くなかで戦争体験、戦場体験者も鬼籍に移り、やがて戦争経験者が皆無になる、真の平和国民出現の国が誕生する栄誉が近づきつつある。

だのに、先の戦争を語り継ぐ人々の中に、人間の尊厳を最大限に破壊する戦争の野蛮性、横暴、非人間性の怖ろしさを体験せぬ年代層で、戦争のできる憲法改正を目指す人達が、昭和の戦争で多くの犠牲者を出した最大の原因は「生きて虜囚の辱めを受けるな」と、東条英樹が戦陣訓で降伏を禁止したからだ、まことしやかに公言し、その説が定着化へ向い、国民へ浸透している怖さを私は肌で感じ、おののいている。

と、言うのも私を含め私の知る、陸海軍人で生き残りの人達は、軍隊で「戦陣訓」からの教育命令など受けたことは皆無と証言し、戦陣訓を持参し入隊した新兵から没収し全員の前で焼却し「東条英樹如きが何を言うか、大日本帝国軍人の命令系統は万世一系の大元帥陛下直属である。」と、訓示したのである。因みに関東軍第六国境守備隊であった私の直属命令系統は天皇である大元帥陛下―関東軍司令長官(山田乙三)―旅団長(浜田十之助)―大隊長(千葉徳明)―中隊長(佐久間右門)―班長(武田岩夫)であった。

世界に類のない、日本軍の人間の尊厳を否定し、全人格を剥奪できた理由は何故かも戦陣訓に隠されている。その非人間的な体験を知らぬ者達の、まことしやかな、戦陣訓引用の狙いは只一つ、東条への戦争責任転嫁に他ならない。利用された「戦陣訓」全文を掲げ諸氏の判断材料に提供させて頂くことにした。尚、大元帥陛下より帝国陸海軍将兵に下賜された直属命令「戦闘間將兵の心得」は「戦闘中負傷するも自ら応急の処置を施し、八方手段を尽くし戦闘を続行すべし、喻え戦闘に耐えざれども後退すべからず」「戦闘激烈にして負傷続出し、或いは紛戦を惹起し命令徹底せざるかは指揮官を失いたるも、自己の銃剣を信頼し一兵となりても戦闘を続行すべし」であった。

.....
戦陣訓―意識―(陸軍省 昭和十六年一月八日)

序

戦場は、天皇の命令に基づいて、天皇の軍隊の神髄を発揮し、攻めれば必ず勝ち、戦い取った所には天皇の政治を広め、敵にも天皇の威光に感銘を与えさせるものである。そのために戦場に臨む者は、深く天皇国家の使命を体(から

だ）全体で受けとめ、天皇の軍隊の道義を強く持ち、天皇国家の威厳を周りの国々に拡大することを心掛けるべきである。

思うに軍人の精神の根本は、天皇が発した「軍人勅諭」に明らかにされている。又、戦闘や訓練など守るべきことは、法令や命令に示されている。ところが一方、実際の戦場においては、ともすれば目前の現象にとらわれ大切なことを見逃し、時には軍人らしからぬ行動をとることもないとは言えない。このようなことは深く慎むべきことである。この「戦陣訓」は、これまでの経験を参考にし、常に戦場においては「軍人勅諭」を仰ぎ、それに従い行動することを心掛けるために、具体的行動の拠り所を示し、それによって天皇の軍隊の道義を高めることを目的としている。

本訓 その一

第一 天皇国家

我が国は天皇国家である。国を始めた時から永久に一つの血筋を引いた天皇家が国家を治めてきた。天皇家の恩は万民に広く行き渡り、世界の隅々までその威光で覆われている。又、臣民（国民は天皇の家来という意味）は天皇家に忠孝を尽し、先祖から子孫まで天皇国家の道義を遍く広め、天皇の政治を助け、即ち天皇家と臣民が一体となって我が国の繁栄をもたらしてきた。戦場の将兵は、天皇国家の大本（おおもと）を体得し、少しも揺るぎない信念をもって、天皇国家を守るという大任をやり遂げることを心掛けるべきである。

第二 天皇の軍隊

軍隊は天皇が統帥する下、気高い武勇の精神を現して、天皇国家の徳を高め、天皇家の幸運を助けるために働くものである。常に天皇の心を奉って、正直で遅しく、遅しくて優しく、よく世界の平和を現すものが、即ち「神武（じんぶ）の精神」である。「武」は厳しくなくてはならない。「仁」はすべてに、行き渡らなければならない。

とはいえ、天皇の軍隊に対抗する敵があったならば、烈しく勇ましく奮い立って断固敵を撃破すべきである。仮に厳しく敵を屈伏させたとしても、服従する者に慈悲の心を忘れたならば、まだ完全とは言えない。「武」は例え強かろうと奢らない。また「仁」を行ったからといって飾らない。溢れるように自然にできて、始めて尊いということが出来る。天皇の軍隊の本領は、恩恵と威光を同時に行うことであり、広く世界の人々に天皇の権威を仰がせることである。

第三 軍紀（軍隊の風紀と規律）

天皇の軍隊の風紀と規律の神髄は、天皇に対して絶対服従であることを崇高な精神とする。上の者も下の者も、天皇の統率が尊厳であることに感銘し、上の者はその責任を全うするために、下の者は心から服従の誠を捧げるべきであ

る。天皇に対する忠義で互いが結び合い、血流のように繋がり、全軍が一つの命令で寸分の乱れもないのが、戦いに勝つ必須条件であり、又、これが天皇国家治安確保の方法である。

特に戦場は、極限まで服従の精神を発揮するところである。死ぬか生きるかの戦場において、命令一つで、きっぱりと身を犠牲にし、黙々と献身的に服従し行動することが、天皇の軍隊の軍人精神の最も重要なところである。

第四 団結

軍隊は天皇を頭首と仰ぎ奉る。天皇の意思を一身に受け、忠誠の思いに心を燃やし、全軍が身も心も一つになっていかなければならない。軍隊は、統率が基本であるから、隊長を中心に固く結びつき、しかも和気あいあいとした団結をつくるべきである。上の者も下の者もそれぞれ自分の立場を守り、常に隊長の意思に従い、生死や利害関係を乗り越えて、全体のために自分を捨てる覚悟をもつべきである。

第五 協同

全の兵が心を一にし、自分の任務に一生懸命になると共に、戦いに勝つためには、喜んで自分を犠牲にし協力の精神を発揮すべきである。各部隊は、互いにその任務を重く見て、名誉を尊び、互いに信じ合い、自ら進んで困難な任務に向かつて、目的達成のため力を出して戦うべきである。

第六 攻撃精神

戦闘とは本来勇猛果敢の精神で押し通すべきである。攻撃に当たっては積極果敢に堂々と、敵を打ち負かさなければ終わらないという決断が必要である。防御に当たっては、攻勢の鋭気を持ちつつ、常に主導権を握る戦いが必要である。敵に戦場を無条件に明け渡すことは決してするな。勇敢に進めば恐れもなく、大胆に進めば難局にも対処でき、強い信念で困難に打ち勝って、あらゆる障害を突破して勝利のために進むべきである。

第七 必勝の信念

信じることは力となる。自らを信じ毅然と戦う者は常に勝者となる。必勝の信念は常に訓練の中から生まれる。時間を惜しんで心の底から、必ず勝つのだという実力を養っておくべきである。戦いの勝敗は天皇国家の盛衰に関わる。光り輝く軍隊の歴史に照らしてみても、百戦百勝の伝統に対して自らの責務を肝に命じて、断じて勝たねばならない。

本訓 その二

第一 敬神

天皇家の祖先の神々は天上にあって我々を守っている。心身を鍛練し、厚く

神への敬いを持ち、常に忠孝を心に念じて、神の加護に恥じないようにしなければならぬ。

第二 孝道

天皇に忠義、親に孝行の「忠義」の精神は我が国が優れていることを現しているもので、忠誠を尽す者は、必ず孝行者である。戦場では深く父母の志を体（からだ）全体に受け止め、忠義を尽し、以て先祖代々の優れた風習に応えなければならぬ。

第三 敬礼挙措（きよそ） 挙＝行動。措＝静止。

敬礼はこの上ない、純粹な服従の気持ちを感じているのであり、又、上の者や下の者にとっても一致した表現である。戦場においては、特に厳格で公正な敬礼を行わなければならない。礼節の精神を心の内に満たし、動作がきびきびしていることは強い武人であることの証しである。

第四 戦友道

戦友のあるべき姿は天皇の志の下で、生と死で結び合い互いに信頼の真心を持ち、常に磨き合い、助け合い、戒め合って、共に軍人の本分を全うすることである。

第五 率先躬行（きゅうこう） 躬行＝自分自身で実際に行う。

部隊の幹部は熱意をもって模範になるべきである。上の者が正しくなければ下の者は必ず乱れる。戦場では実行を尊ぶ。我が身をもって臣下より先んじて毅然と行わなければならない。

第六 責任

天皇の軍隊の任務は神聖である。責任は極めて重い。一つ一つを簡単に考えず、心魂を傾けて一切の手段を迅速にし、目標達成に失敗がないように心掛けなければならない。

第七 死生観

生と死を貫くものは、天皇に対する崇高な献身的な奉公の精神である。生と死を乗り越えて一つの任務を遂行することに全精神を使わなければならない。心身すべての力を発揮し、おおらかに天皇の意思に従って生きることが悦びとしなければならない。

第八 名を惜しむ

恥を知るものは強い者である。常に郷土、一族の面目を考え、一層努力してその期待に応えるべきである。生きて虜囚の辱めを受けないこと、又、死んでも罪や災いを残さないこと。

第九 質実剛健

質素さをもって戦場の生活を送り、遅しさををもって旺盛な士気を奮い起こさなければならぬ。又、戦場の生活は簡素でなければならぬ。不自由が普通だと思い、節約に努めるべきである。贅沢は猛々しい精神を駄目にするものである。

第十 清廉潔白

心が清らかで無欲なことは軍人の気性の根本である。己に勝つことができず、物欲にとらわれる者が、どうして天皇国家のために身命を捧げることができようか。生きていくことに厳しくなければならぬ。物事に対処するには公正でなければならぬ。行動は天地に誓って恥じることがないようにしなければならない。

本訓 その二

第一 戦陣の戒

一、一瞬の油断が予想もしない大事を生む。常に備えを厳に警戒すべきである。敵や住民を軽くみて侮ることを止めよ。小さな成功に安心して、苦勞を嫌がることのないようにせよ。不注意もまた、災いのもとになることを知らなければならぬ。

二、軍隊の秘密を守ることに細心の注意をせよ。スパイは常に身近にいる。

三、見張りの役目は重大である。それは、一つの軍隊の安否を決定したり、一つの部隊の風紀や規律を代表するようなものである。従って身をもってその重さに耐え、厳粛にその任務を行うべきである。

四、思想戦は現代戦の重要な一面である。天皇国家に対するゆるぎない信念をもって、敵の宣伝やデマを打ち破るだけでなく、逆に天皇国家の宣伝にも努めるべきである。

五、噂やデマは、信念の弱い者に生まれる。迷ったり悩んだりするな。天皇の軍隊の実力を確信し、上官を厚く信頼すべきである。

六、敵側の財産や物資の保護に留意する必要がある。徴発や押収、物資の消滅等はすべて規定に従い、必ず指揮官の命令によらなければならない。

七、天皇の軍隊の本義に照らして、敵側の事なき住民に対しては、思いやりの心で守ってやるべきである。

八、戦場において、いやしくも、酒や女に心を奪われ、欲情に駆られて本心を失って、天皇の軍隊の威信を損ねたり、天皇への奉公の身にとって、あつてはならないことをしてはならない。常に深く戒め慎み、決して軍人の節操を汚さないように心掛けるべきである。

九、怒りや不満を押さえることである。「怒りは敵と思え」の諺もある。一瞬の怒りが後々まで悔いを残すことが多い。軍法の決まりが厳しいのは、軍人の榮譽を保ち、天皇の軍隊の威信を完全なものにするためである。常に

出征当初の決意と感激を思い出し、故郷にいる父母妻子の気持ちに触れ、仮初にも罪を侵す事があってはならない。

第二 戦場の嗜（たしなみ）

一、武事や軍事の伝統から、軍人精神を養ったり、技術を磨くことに努めるべきである。「いつも退屈することなかれ」と、昔の武将の言葉である。

二、後々の心配を断ち切り、ただ天皇への奉公の道のみ励み、常に身の回りを整理して、死後を清くすることも大切である。もともと、死体を戦場に晒すのは軍人の覚悟である。従って遺骨が故郷に帰らない場合もあるから、それは気にすることではないということを、前もって家人に理解させておくべきである。

三、戦場において病気で倒れるのは極めて遺憾なことである。常に衛生には気をつけ、己の不節制によって天皇への奉公に支障がないようにしなければならない。

四、刀を魂と思い、馬を宝とした古武士の考えを心とし、戦場においては常に兵器や資材を尊重し、馬を愛護しなければならない。

五、戦場における道徳は、戦力のもとになる。常に他の部隊の利益も考え、宿舎や物資を独占するようなことは慎むべきである。「立つ鳥跡を濁さず」という諺もある。勇ましく、ゆかゆかしい天皇の軍隊の名前を異郷の地においても永く伝えられるようにしたいものである。

六、すべて手柄を自慢せず、成功を他人に譲るのが軍人の誉れである。他の人の出世や成功をねたまず。自分が認められないことを恨まないで、反省して自分の足りないことを考えるべきである。

七、いろいろなことに対しては正直を第一とし、大袈裟に言ったりすることは恥と思え。

八、常に大日本帝国の心の広さを持って、正義を行い、義理を貫いて天皇国家の威厳を世界に示すべきである。

九、「万死に一生」を得て、故国に帰れることができたなら、共に国を護るために戦って死んでいった者に思いを巡らし、言葉遣いや行動に気をつけて、国民の模範となり、ますます天皇への奉公の覚悟を強くもつべきである。

結

以上述べたことは、結局「軍人勅諭」から発し、そして「軍人勅諭」に帰ることである。従ってこの「戦陣訓」を戦場での道徳の実践の参考にし、「軍人勅諭」の実践が完璧になることを目指すべきである。戦場の兵士すべてが、この趣旨を体（からだ）全体で受けとめ、ますます天皇への奉公の気持ちを高め、軍人の本分を完璧にして、天皇の恩に対し応えられるようにすべきである。

以上。

編集後記

戦後64年、戦争で肉親財産を失した犠牲者今や少く、戦争知らぬ世代から戦争肯定論あり、これ歴史は繰り返す愚行也と思う。

戦後64年、この64年の長い間、戦争での人殺し皆無の凄い記録更新中。もう少し待つと、戦争で人を殺した経験者も皆無に。平和民族ニッポン誕生。9条と共に世界へ向けアピールしよう。

戦後64年、戦争体験を語り継ぐは戦争を知らぬ年代へバトンタッチ。新世代の語り部達よ、敗戦から生まれた憲法9条を、民族・宗教争いの歯止めに、世界平和原動力に9条を「世界の宝」へ。

戦後64年、40年ほど前に従軍慰安婦であった方との対談を思い出す。男は占領地では良かったと昔を懐かしむのよ。親方日の丸に逆らうと、憲兵に捕まり731行きだから、仲良し振りをしたのさ。戦争の怖さを女は忘れないよ。子を産み育てるから。と。

戦後64年、まだ苦み続く棄民扱いの犠牲者残留孤児。日本鬼子（リーベンクイズ）の子に付けた、育て親が選んだ文字を知って欲しい。子の将来に幸多かれとを願う文字を選びし心根を。さすが漢字王国中国。素晴らしき文字の数々。大人の国、中国を。

戦後64年、戦争の苦しみは私一人であの世まで持って行くと誓ったのに、孫を抱いた瞬間誓いが崩れ、平和を願い戦争の苦しみを話す人多しと聞く。本体験集も子連れ逃げた母親談で占む。

戦時体験記録集（第十六集）

編集・印刷・発行

戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日

平成二十一年七月二十五日

発行部数

百五十部